
まつげの先より近い距離で

あざみの茶太郎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

まつげの先より近い距離で

【Nコード】

N8069S

【作者名】

あざみの茶太郎

【あらすじ】

彼女の恐ろしい復讐は昼夜を分かたず行われる。

彼女は、三日かけて彼のすべてを奪い取る。

だがしかし、この復習の裏には、わたしも知り得なかった彼女の目的が隠されていた。

彼女の恐ろしい復讐は昼夜を分かたず行われる。

わたしがその片棒を担がされるようになったのは昨日の夜からで、彼女の企てた謀略が滞りなく遂行されさえすれば、もう明日の朝にはわたしはその役目を終えることになる。

「裕子さん、ごめんね。お世話になってるのにこんな料理しか作れなくて」彼女は言ったけど、目の前のテーブルに所狭しと並べられた色とりどりの料理に、わたしはひとつも不満なんて持たなかった。カーペットの上に座布団一枚、布きれ一枚敷かずじかに座るわたしと彼女。ふたりが囲むのはひと世代前の丸テーブル。彼はもちろん素足で、不安定な足場に短い足を直立させる。箸を皿にのぼすたび愉快に足を踏みならす短足テーブルを、女ふたりでこれでもかと踊らせる。そうすると、わたしも愉快になってくるし、もしかしたら彼女もそうかもしれない。

しかし彼女の視線は大皿のひじきに注がれていて、必死にアピールする軟派で堅牢な彼の想いは儂くも散ったのだった。

彼女の青柳の眉に切れ上がった目元には宝塚の男役を思わせる凜凜しさがあり、それに似合わしいさばさばした気性には、言うてはなんだが男性的な魅力を感じる。そして、それはまさにこの家庭的な料理とは結びつくものではなかった。

「どれもこれもおいしいわ。わたしが作る夕食とは比べものにならないもの。わたしも結婚するまでには冴恵さんくらい料理ができるようにならなくちゃ」

わたしが賛した彼女の料理は、絵に描いたような一般的和食で、彼女はそれを絵に描くよりも容易くこしらえた。

「そう。手料理を褒めてもらったのなんて、どのくらいぶりかな」彼女の投げ捨てるような語気と密かに寄せた眉のしわにより、この部屋において『結婚』とそれに属する言葉は禁句になった。

彼女がこの部屋に来た理由も忘れて、考えなしに言葉を口にしたことを後悔した。

彼女は黙々と箸を進めているし、わたしもこれ以上気まづくなるのは避けたかったからそれ以上はなにも言わなかった。

昨日からこの部屋が少し息苦しくなったのは、1DKのアパートに人がひとり増えて酸素濃度が低くなっただけではなく、彼女の連れてきた重い復讐の念がそうさせていたのだった。

「ごめん。気を遣わせちゃってるね」

細く流れる眉を少し歪ませた彼女に、そんなことないよ、と首を小さく横に振った。

端なくもささやかな外灯ではの明るくライトアップされた隣の公園の八重桜は、決まった時間にこの部屋に春の色を落とした。時計の針が密やかに夜の六時を知らせると、窓を覆う白いカーテンはあたかも昔からそうであったかのように平然と自分の色を変える。

部屋に入る明かりで浅い桜色のベールをまとった彼女は、わたしにお礼を言っつて冴えのある笑顔を返した。

わたしも彼女に笑顔を向けた。

そうこうしているあいだにも、仇敵は彼のすべてのうち、すでに三分の二を彼女に奪われていた。

今日もわたしはひとりきりで一日を終えようとしていた。

小さなわたしの住みかは、わたしの体、わたしの生活に完璧にフィットしている。窮屈のぎりぎり手前が堪らなく心地よくて、わたしは毎日必ずここから一日を始めて、必ずここで日を閉じた。

明日から二日間は仕事もお休みだし、テレビのバラエティー番組でも見ながら少し酔おうかとベッドに寄りかかってビールの缶を開けたところまでは日常だった。

週に一度なるかならないか、なっただとしても招かざる怪しい勧誘員がわたしをそそのかしに来るだけの玄関のチャイムがこんな時間になったのは非日常で、動物的感覚が拒否反応を起こしたのは当然であった。

テレビの音がゆるやかに震わせていただけの部屋の静かな空気の上に押し上げて、わたしはもたもたと玄関へ歩く。

その過程で通る狭くて小暗い台所。そういえば、換気扇のフィルターはそろそろ換えどきかも知れない。それから、チャイムの音を小さく感じたのは勘違いではなくて、これも乾電池の交換が必要なのかも。

到達した灰色のキッチンが一番奥。ドアの覗き穴に目を当てて訪問者を確認する。身なり、持ちもの、そして判断の決定打となる人相の特徴から、その人が刊行物の見本を持ってきたわけでも、尊い教えを説きに来たわけでもないことを確認した。

「今開けるわ」

鍵ひとつで固定されただけの赤錆びたドアは、わたしの華奢な腕一本で悲鳴を上げて開く。

「こんな時間にどうしたの？」

「裕子さん」

開いた厚いドアの向こうにいたのは冴恵さんではなくて、薄暗が

りを背負った影だった。

「急に、ごめんね」

いたずらした子供のような茶目っ気のある笑顔を見せたのは、やはり他の何者でもない、在りし日のままの冴恵さんだった。

彼女の手には大きなボストンバッグとぱんぱんに膨れたビニール袋の取っ手が深く食い込んでいる。そのさまはさながらヤジロベエかお相撲さんの土俵入りで、ユーモラスと威圧感を比類なきバランスで調和させていた。

「とりあえず上がってちょうだい」

わたしは手荷物の片一方を引き受けて彼女を部屋へと誘い入れた。持ったビニール袋のなかは缶が押し合いへし合いの大混乱で、わたしが一歩進むごとにお互いがぶつかり合って柔らかい金属音のうめき声を漏らした。

気になるもう一方の荷物から察しようとするのなら、旦那さんのケンカの末に家を飛び出してきたのだろう、と考えるのが筋だろうが、線の太い彼女に限ってそれは万にひとつだってないことだ。

「二日間だけ泊めて」

テレビのちらつく部屋に一歩足を踏み入れたところで、わたしは彼女の声に振り返った。

「わたしね、家を出てきたのよ。あさつての朝には出ていくから、それまでいさせて」

薄暗い台所でひとつ清かに浮かぶ彼女の表情は、輪郭も目や鼻の境も、くつきりと周りから縁取られて見える。

その彼女の口調はわたしの判断を待っていないかった。まるでもう約束していたみたいで、いいよ、と言ったことさえ不必要で余計なことだったように思えた。

「恩に着るわ」

明るい部屋に向き直ったわたしの後ろで、彼女は小さく言った。

目方だけでなく図体もなかなかのくせに、甘えて足にまとわりついてくる邪魔なビニール袋を低いテーブルによっこらしよと乗せて、

彼女を部屋のなかに誘導した。

「冴恵さんがこの部屋に来るのって久しぶりね」

「だって狭いんだもの、ここ」

悪かったわね、と拗ねて、彼女から無理矢理引ったくったポストンバッグをベッドにもたせかけた。

「それでも、わたしひとりのときは狭くないんだけどな。誰かさんが容積を取るから狭くなるんじゃないかな」

彼女が最近気になってきたと言っていた頬の肉を人差し指でひと突きすると、彼女は素っ頓狂な顔の口元に手の平を添えて、この貴婦人を掴まえてなんてこと言うの、という感じに振る舞った。

「冴恵さんて演技がお上手ね」

「淑やかなのは素質よ」

彼女が、くるつと回って薄っぺらなスカートを両手でつまみ上げ、いかにもおとなしくお辞儀をしたものだから、いよいよ堪えきれなくなつて大笑いした。

「飲んでわけがわかんなくなっちゃう前に、お布団を探しておくわ」「お世話になります」

彼女の少し申し訳なさそうな笑顔に、にこつと笑顔で返事を返し、わたしはお客さん用の布団類を探しに小さなウォークインクローゼットに入った。

「裕子さんも飲もうとしてたところだったのね」

わたしがクローゼットから顔を出すと、彼女は置きっぱなしにされた缶ビールをひょいと持ち上げてその重さを確認した。

「冴恵さんつたら、グッドタイミングだったわ。ひとりで飲むよりふたりの方が楽しいし、それにそんなに買ってきてくれるなんて」

宝石や骨董の目利きじゃなくても、あの黄金色の静水が詰まった銀の杯の価値は二十歳を過ぎた辺りで誰もが知るところとなる。

彼女は本当の宝石かなにかを扱うように、もしくは番町皿屋敷のように、ひとつ、ふたつ、と買ってきたお酒をテーブルの上に丁寧に並べはじめた。

わたしはまたクローゼットのなかに舞いもどる。

正面の床にはなにかの拍子に買って以来、箱に入れたままでそこに置きっぱなしにしてある魚焼きグリル。その上にはなにかに使えると思つて取つておいたダンボールと紙袋の山。横の棚に散らかる各種資格試験の参考書、英会話の教材、ピアノの楽譜。そして最深部に眠る来客用の寝具一式。

そこには堆く積まれたがらくたと無数に横たわる夢があつた。

「お布団あつたわ」

再びクローゼットから顔を出したとき、テーブルの上はビールにチューハイに安物の小さいワインが飾る鮮やかな宝石箱みたいになつていた。

「すごい量でしょ」彼女は笑い顔で言つた。彼女が持つてきた、『ちよつとほろ酔い』は期待できない量のアルコール群から予想するに、春の陽気も重なつて、朝には布団を敷くこともなくこのままふたりしてごろ寝していることだろう。

「とつてもふたりで飲みきれる量じゃないわね」

テーブルを挟んでテレビに向かい合う恰好でわたしもカーペットの上に腰を下ろす。

「わたしと裕子さんが力を合わせれば、やってやれないこともないわ」

ほおと息をついて、彼女が差し出した缶を掴んだ。

「裕子さん、まずは乾杯ね」

わたしの缶と彼女の持つ缶はぶつかつて小さい音を立てた。

彼女がぐつと飲むのを見てから、わたしは小さくひと口だけ口に含んだ。彼女の表情はそれは晴れ晴れとしていて、なにかに心を煩わせている翳なんて少しも見あたらなかつた。

それにしても彼女の飲みっぷりと言つたら、これからの何時間かでこれらを親のかたきのように片っ端から片付ける姿が容易に想像できてしまふ。

「わたしね」

彼女は最初の長いひと口をやつと終えて口を開いた。

「わたし、あの男が憎くなったの」

親のかたきはお酒ではなく『あの男』らしく、その人物こそがことのカギを握っているのは明白だ。彼女がここに来ることになった理由に深く関与していることはまず間違いない。

「旦那さんのこと？」

まさか三歳になる一人息子ということはあるまい。

「最悪な男よ」

「とてもいい人そうだったじゃないの」

いい人が過ぎて、濡れ衣でかたきになりそうな気配はあるが、それではあまりに彼が気の毒で、わたしは自然と旦那さんの擁護派に回った。

「冴恵さん、早まった決断をしてはダメだわ」

「裕子さんは本当のあいつを知らないのよ。わたしは五年間一緒にいて、ついに最近本性を暴いてやったの」

そう言ったあと、彼女は千の言葉で夫を罵り、千の言葉で自分の不幸を哀れんだ。冗談っぽく大袈裟なモノログからは、本気で彼を憎んでいるのか、彼女の本心を汲みとることはできなかった。

部屋にとうとうと流れでる彼女の哀話は右へ左へと徘徊し、そのワンセンテンスごとに打つわたしの相づちは完璧なものだった。餅つきで言うなら熟練の返し手で、わたしはつき手のすべてを理解していた。振りおろす杵のタイミング、力加減、技量、情熱、手のまめの数、体力、努力、持久力、居住地、勤務地、夫の名前、小さい頃の夢、心理、感情、少ししゃべり疲れた表情。

わたしが三本目の缶チューハイを開けたとき、彼女はすでにその倍の量を飲み干していた。

「復讐してやることにしたのよ。この五年間を無駄にしてくれたあいつに」

「復讐だなんて穏やかじゃないわね」

とんでもないことをするのではないかと心配するわたしをよそに、

満面に笑みを浮かべた彼女はわたしの両肩に手を置いた。

「あいつからすべてを奪い取ってやるのよ」

「すべてを奪い取る……」

彼女のただならぬ言葉にわたしは度肝を抜かれた。

「ただの家出じゃなかったの？」

彼女は黙って首を横に振り、ついにその過激な復讐の全貌を明らかにした。

彼女は、三日かけて彼のすべてを奪い取る。

手はじめに彼女はここに来る前に彼の全財産を奪い取ってきた。

現金も通帳も印鑑も、洋服ダンスと壁の隙間に転がっていた硬貨も全部持ってきたのよ、と言って彼女はかんらんらと笑った。

わたしはおしゃべりなテレビの音量を下げて彼女に正対した。

計画は何週間も前から綿密に練られてきたものだったというが、彼女がそんなことを計画していたなんてずっと気づけずにいた。

今日だって計画実行の当日であるにも関わらず、会社のエントランスで顔を合わせたときから、定時にさよならを言うときまで、平静を装う彼女の心服を見抜けなかった。

「もしわたしがここに泊めるのを断ったら、せつかくそれだけの時間をかけて考え上げた計画が台なしになったのに、どうして前もって言うてくれなかったの」

そう言ったわたしに彼女は、「とにかく実行に移すまでは、普段の生活を変えないの。そうして誰にも悟られないようにするのよ」と密計のプロみたいな口調で切りかえた。わざと大仰に語る彼女は本物の演者みたいで、それにはいつも笑わされる。

「今思うと結婚する前から気に食わないことだらけだったわ。言うのよ、文句を。冴恵は少し男っぽいや、なにをするにも雑なところがあるとか、日記は三日坊主だとか……」

彼女は熱いこぶしを握りしめた。

「でもそれって女には必要な愛嬌ってものじゃない？　ちよつと大雑把なくらいの方が家庭のなかはぎすぎすしないし、三日坊主だつてご愛敬よ」

わたしは、うん、うん、と完璧な相づちを打ちながら、話の行く先を本線へと導く。彼女はそれに合わせて事実をひとつひとつ明かしていく。

「それで、今日ここに来る前のことよ」

仕事を終えて家に帰った彼女は、夕まぐれの日が鮮明な浅紅を映す部屋で一本の電話を受け取った。

「それがあいつとの最後の会話になつたわ」

「旦那さんからの電話だつたのね」

旦那さんと会話をして、復讐なんてこと思いとどまりはしなかつたのだろうか。

わたしは四本目の缶チューハイに手をのばす。

「ここ数か月ばかりあいつの仕事の時間帯が変わつて、会わない時間が多くなつたから、形ばつかの気遣いで電話かけてきたのよ」

彼女は興奮気味に声を震わせた。

「あいつが帰ってくる時間にはわたしはとづくに寝ているし、わたしが出る時間にはあいつはまだ寝ているしって感じで、会話を交わすのもしばらくなかつたのよ。……まあ、そんなの別に気にしてなかつただけどね」

どうでもいい会話をひとしきりしたあと、電話を切った彼女は、すぐに計画を実行に移したのだった。

「これ、見て」

彼女が差し出した指は、鮮やかな藍色の宝石が埋め込まれた、小さいお花みたいな指輪が飾られていた。

「かわいいわ。家から持ってきたお金で買ったのね」

彼女がかつこつけて天井の照明にかざしたその指輪は、かつて結婚指輪がはめられていた指にはめられていた。

「お店ではね、あのでっかいバッグと、きつちりスーパーのロゴが

入ったビニール袋を抱えて選んだのよ。なかなか斬新でしょ」

宝石店と、玄関に現れたときの彼女の姿を重ねあわせてみた。

「せめてスーパ―に寄る前に行った方がよかつたんじゃないの」

「なに言ってるの。そうしてれば、店員が荷物持ちを買って出るじゃない。軽い女王様気分を味わえてよかつたわ」

彼女には少し嗜虐的傾向がある。華奢な男性店員がひいひい言ってるのを裕子さんにも見せたかつたわ、と思いい出し笑う彼女に理性を取り戻してもらおうと、わたしはその赤くなつたほつぺたを挟み込むように優しく叩いた。

「大丈夫、大丈夫。まだ普段と変わりないわ」

本当に普段からこんなんでは、逃げ出してきたのは旦那さんの方だつたらう。

「でも、ちよつと暑くなつてきたわね。着替えたいからバッグ取つてちよつだい」

彼女はアルコールを摂つても顔に出にくいタイプなのに、今さつき触れた頬はぼかぼかして、外の桜みたいな春らしい色に染まっていた。

「はい。すごい膨れてるわね」

わたしが手を伸ばして取つたポストンバッグは物がぎゅうぎゅうに詰まつていて、それを体で受け取つた彼女は座つたまま体勢を崩し、そのまま後ろに寝転がって天井を仰いだ。

「ねえ、本当に大丈夫？」

覗き込んだ彼女の眼は夢を見ていた。

「ちよつとだけ、飲み過ぎたかも」

彼女はふらふらと立ち上がつて半袖のシャツに着替え、仙人のような目つきのままでまた座り込んだ。

「外の風にあたろうか？」

彼女は無言で頷いた。

わたしは彼女に肩を貸してそろそろと玄関まで連れて行き、か弱くたたずむドアを腕一本で押し開けた。

「階段を下りるわよ」

一段一段、足を踏み外さないように狭い階段を下りる。窮屈なアパートの駐車所を素通りして、これもまた狭い路地に出る。足下がおぼつかない彼女をその縁石に座らせ、わたしもその横に腰を下ろす。

今日は少し肌寒いくらいで、時折吹く風は懐かしい冬を覚えていた。隣に座る彼女は時々体を震わせながらも、点々と灯る外灯の数を熱心に数えている。

「寒くない？」

林立する安アパートと一戸建ての群れの隙間を縫ってそよ吹きこむ風に、彼女の額にかかる髪がまたなにかささめく。

「うん、大丈夫。気持ちいいくらいよ。裕子さんは寒くないの？」

彼女は深呼吸して、桜の花びらが浮かんだ大気の美酒を酔い醒ましにひと呑みした。

「わたしも大丈夫」

そう言って、静かな彼女の前髪にまた耳を澄ます。

今夜は昨日までより少し風が冷たかった。

それでも、それなりに着込んでいた暖かさが心地よくて、圧倒的な夜の闇に何度か吸い込まれそうになった。

「いつか話したかな」

彼女はおもむろに口を開いて、うつらうつらしていたわたしを呼び覚ました。

「あいつとはね、学生時代につき合いだしたの」

わたしは若い頃の彼女を想像した。

「うん、そうだったね。聞いた覚えがあるわ」

彼女はこくりと頷く。

「だからね、結婚する前も合わせたら、あいつとの付き合いはもう十年にもなるわ」

「うん」

「それだけの時間があつたら、冷めてしまうのって仕方ないこと

だと思っ？」

「えっ」

彼女の目を見つめて、今の言葉を何通りにも解釈し、そしていくつかの有力な候補を心のうちに並べた。

「それって、まさか、旦那さんが……浮気したってこと？」

彼女は首を左右に振った。

「それじゃあ、あの、冴恵さんに、好きな人ができたとか」

わたしは自分の足下に視線を移して問いかけた。

「んーん。そんなわけないじゃないの」

「うん、ごめん。そうよね」

彼女がなにを思っていて、なにを言いたかったのかがわたしには全然わからなかった。

わたしは視線をあちこちへ向けた。彼女の座る左側の道はすぐにふたまたに分かれている。そこに外灯が一本。そして右の道の果ては真つ暗な闇に覆われていて、その前に並ぶいくつかの外灯の明かりさえも先には届かない。そういえば、目の前の道の向こう側にも外灯がひとつ。その足下で風に巻き上げられる塵はまるで楽しく踊っているように見えて、それからはしばらくは黙ってそれを観覧していた。

「ねえ裕子さん」

わたしは久しぶりに彼女の顔を見る。

「ここってS席よね」

彼女も同じことを考えていたのがおかしくて、思わず顔がほころんだ。

「もうだいぶ楽になったみたいね」

彼女はこちらを向いて首を縦に振った。

「アパートの裏手に小さな公園があるじゃない。今あそこの桜が満開なんだけど、今から見に行かない？」

わたしは羽織っていたカーディガンを彼女にかけながら訊いた。

「ありがと。あったかいわ」

彼女はまどつたカーデイガンの襟を握りしめながら、「夜桜見物なんて風情があつていいわね」と立ち上がった。

「こつちが近道よ」

わたしも立ち上がり、彼女の手を引いて水路の通るアパート脇の道とも言えない道に入った。

「小学生なんか好んで使いそうなすごい道ね」

「でしょ」

アパートと隣の敷地とのぎりぎりの境界線を綱渡りするみたいに危なっかしく渡る。ブロック塀の狭い隙間すり抜け、突然開けたここでは、ジャングリズムやブランコ、それからさつきまで隠されていた空と、そこに懸かる淡紅色の春の雲が静かな夜の明かりに照らされていた。

彼女は塀に擦ってしまったわたしのカーデイガンの汚れを懸命に払ってくれている。わたしはといえば、そこにあるすべてを手に入れたような独占感に心を支配されてしまい、公園の中心まで走って両腕を思いきり上に伸ばした。

「裕子さんの部屋から見えるのとは景色が違うのね」

後ろからゆっくり歩いてきた彼女を見て、わたしの方が酔っぱらつてはしゃいでしまったみたいで恥ずかしくなった。

「うん。違うね」

わたしは照れを胸に押し隠し、澄まして公園の周りに植えられた数本の八重桜を眺めた。

「ねえ、冴恵さんもこつて隠れた名所だと思わない？」

「うーん、そうねえ」

目を細めたり開いたりして、公園を見渡した。

「地味だけど、まあ全体のバランスは取れてて、そこそこいいって感じかな」

今度はプロの写真家になった彼女。一本の桜に的を絞った先生は両手の親指と人差し指で長方形のフレームを作り、わたしはそのなかに飛びこんでポーズを取った。

「よし、わたし決めたわ」

彼女は夜空を仰いで、自身の手で切りとった小宇宙に焦点を合わせた。

「あの月に誓ってこの計画は成功させてみせる」

彼女は直径一・五センチメートルの小さな春月に誓いを立てて、ひらりと身を返した。

「粹なことするじゃない。今の姿も絵になるわ」

今度はわたしの作ったフレームのなかで、彼女は笑ってくるりと回った。

空を仰ぎ見ると、吹いた風に花びらが舞い上がっていて、見分けのつかなくなった星の光と桜の花びらがわたしたちに向かってこちらと降ってくる。

「本当にカメラでも持ってくればよかったね」

わたしは賛同を求めて言ったつもりだったが、彼女はそっぽを向いて突っ立ったままにも言わなかった。

風がやんでしまうと、さっきまで木の枝や干草がざわざわ言っていた公園からはなにもかもがなくなって、童話かおとぎ話に登場する音のないおぼろ月夜が目の前に現れた。

彼女の姿は、そのお話のなかか、それかただの真っ暗闇に溶けこんで消えていってしまえばそれで、かすんだ月よりもぼんやりして見えた。

「冴恵さん」

彼女はこちらを振り向いたけど口はつぐんだままで、眼がなにかを話しかけてきた。

おぼろ月夜の公園に、彼女とわたしと、色を散らす木々だけ。

押し黙る彼女とどれくらいの間だこのままでいるのか不安になったが、彼女は深い瞬きのあと、視線を逸らしてゆっくりと公園の奥へと歩いていった。

わたしは少し公園のなかをぶらぶらと歩いてから、彼女の座るブランコ横の低いベンチに腰を下ろした。

「今ごろあいつはなにしてるんだろう」

彼女はブランコをきいきい鳴らしながら、んーん、きつとぐうすか寝てるんだわ、と俯いた。

今の彼女は、わたしの知る限りでは最高に感傷的になっているように見える。

わたしが上に懸かる桜の花を見上げ、また前に向き直ったとき、彼女はわたしと同じように上を見上げていた。

頭上に咲く淡い色の徒雲が風に吹かれて破片を辺りに散らすのを見て、彼女は、玉響の命なのね、と言った。

明くる日はカーペットの上で目を覚ました。

厚手のカーテンにぼんやりと滲む外光から朝か昼かを推測するのは容易ではなく、体を半分起こして細い目のまま壁に掛かる時計に目をやる。まだ七時を回ったばかりであることを確認してから、首を左右に振って今度は彼女を捜した。

ベッドに横たわる彼女を目が捕え、家主として客人への最低限のもてなしはできたことにひとまず安心し、わたしはまた横になった。昨日の夜はずいぶんと話をしたけど、結局どうしてこんなことに踏み切ったのか、ことの心髓を聞くまでには至らなかった。

たぶん今まで溜まってきたうっぶんが爆発してしまったとか、そんな類のことだと思っただけど、わたしも詮索なんてしなくなかったから詳しく聞こうとはしなかった。

彼女の旦那さんとは一度だけ会ったことがあった。彼女とふたりでこのぼろアパートを訪ねてきたただの一回きりだけだが、誠実そうな彼の印象はとってよかった。確か彼女とは同い年で、まだ三十前だということにも関わらずすっかりした人だと感心した覚えがある。

昨日はそんなことを言っただけでそれとなく彼を褒めてみたが、彼女がその言葉を否定することはなかった。わたしの持っていたイメージは彼女の言う男と割合一致していたのだ。

彼女が言うに彼は、人当たりがよく、人間関係も如才なく立ち回れるために職場ではかなりの人望を集めていて、さらに、そこそこの収入を上げているから、毎月しっかりと家庭にお金を入れてくれるような最悪の男だということだ。

彼女が言うのは要領を得ない繰り言ばかりだったが、最後に、協力頼んだわよ、と言われたのはなんとなく覚えている。

なにを頼まれてなにを引き受けてしまったかわからないが、彼女に圧倒されたわたしはただ頷くしかなかった。

圧倒されたのはそれだけではない。あの記録破りの量をふたりだけで飲みきっておいてわたしが二日酔いをしていないのは、その大部分が彼女によるものであったことを物語っているのだ。

わたしはゆっくり息を吐く。

まだ少し眠いわたしの脳は、目をつむったままこれからの行動をひとつひとつシミュレーションしていく。

まずはトイレに行つて、顔を洗つて、彼女のための胃薬を用意して。そう、それから今日は一日、彼女の誘いで近郊のテーマパークに遊びに行くんだ。どういうわけか、それも彼からすべてを奪う計画の一環だというのだ。

意識あるなかでするひと呼吸、ひと呼吸がもつたいないと感じるほどに睡眠に貪欲な体は、シミュレーションの一切を無駄にしてでもこのままでいようとわたしを誘う。

ずっとこのままでいたらどうなるんだろ。そう思うと鼓動が少しだけ速くなる。

堪らず、目を閉じたままで再び上半身だけを起こした。
少しだけ体がだるい。

こんな日は一日家でごろごろして休養を取っていたいし、横でぐったりしている彼女にはことさらそれが必要だと思つ。

それでも彼女は行こうと言つたろ。

頑固なところがある彼女は、計画を完遂するためなら自分の体に鞭も打つはずだ。

ぼつととしている脳みそをどうにかこうにか奮い立たせて、ついに覚悟を決めて目を半開きにすると、さっきよりも幾分か部屋のなかが明るくなっているような感じがした。

何度かの長い瞬きの末にやっと立てひざをつき、それからひと息ついてようやく立ち上がった。

見渡した部屋は意外なほどに整頓されていて、散乱しているだろうと思われた空き缶は流しに置かれて、もうゆすがれているようだった。

彼女は安らかな顔で眠りこけていて、ベッドの横にある窓を風が叩く程度は、彼女を起こすのに一臂の力にもなっていなかった。

伸びをしたわたしの体の端々からは骨のきしむ音が聞こえてきて、油の代わりにアルコールを差してやった各所の関節からはぎしぎしとだるさを訴えられる。

トイレに行つて、歯磨きをして、洗濯機をスタートさせて。一度目が覚めればわたしはテキパキと作業をこなす。

部屋に戻ってきたとき、部屋のカーテンは目覚めたばかりの彼女によつて開けられていた。

「おはよう」

そう言つた彼女は、ベッドに座つたままで少し体を伸ばした。

「おはよう。気分はどう？」

「最高よ」

彼女がわたしよりもたくさん量飲んでいたのは明らかだったが、「アルコールなんてもう一滴も残つてないわ」と言つた彼女は確かにわたしよりも気持ちのよい朝を迎えたように見えた。

それでも念のためにと、彼女が洗面所にいるあいだに薬箱から胃薬を取りだしておいた。

顔を洗つてさっぱりとした表情になつた彼女は胃薬の容器を見て、そんなもの飲まなくても大丈夫、と首を振つたが、わたしが水を汲んだコップを彼女の手になじむと、あっさり折れて粉末の薬をさじですくつた。

「今日遊びに行くのだからわたしの大切な計画のうちだものね。体調は万全におかなくちゃ」

彼女の旦那さんは昨日だけで彼のすべてのうち、三分の一を彼女に奪われている。

彼女が言うにはこの計画は完璧だということなのだが、わたしは女ふたりで年甲斐もない場所に遊びに行くことによつてなにが変わるのか、彼女から聞いていなかった。

「今日、これからの行動も重要なんだよね？」

彼女は水を含んで膨らんだ頬のまま首を上下させた。

「遊びに行くだけなんだよね。それでも旦那さんからなにか奪うことになるの?」

勢いをつけてひと息に水を飲み干した彼女は、コップをテーブルの上に置いて、一回深呼吸した。

「今日はね、わたしたちはただ遊んでるだけでいいのよ」

彼女は伝法な動作で口元の水滴を拭い、たつぷりと息を吸い込んでもう一度深呼吸した。

「今日一日わたしが家に帰らなければ、それだけであいつの平安な生活は奪ったことになるわ。食事もない、着るものも見つからないで、あいつは家に籠もってもんもんとしているしかないの。いいえ、どうせあいつは今日も休日出勤なんだわ。そうよ。それできつと、あたふたして出社してくのよ」

彼女は、ざまあみるよ、と意地悪く笑った。

わたしはなにも言わなかった。

「さあ、早く出発の準備をしましょう」

彼女は手を叩いて自分の話に区切りをつけた。

わたしは急ぎ立てられるままにウォークインクローゼットに入ったが、気落ちして服をあさる手はしばしば止まってしまった。

こんなことをされる旦那さんのこともそうだけど、それにも増してこんなことをする彼女を考えると、わたしはなぜだか悲しくなってしまう。

駅に着いたときにはもういい時間になっていて、ふたりとも運良く座席に座れたのは、まさに運以外の何者でもなかった。

電車のなかは芋を洗うような混雑で、隣に座る彼女の声も顔を思いきり近づけないと聞こえないありさまだ。

わたしの左側に座っている彼女は混み合う電車が苦手な様子で、乗りこんでからしばらくすると威勢のいい面影はどこかへ消えていつてしまった。

「すごく混んでるわね。お休みだし、遊園地なんて行ったら子連れでいっぱいなんじゃないの？」

わたしの声に、彼女は手を耳に当ててよく聞こえなかったことをアピールした。

「すごく混んでるねーっ」

彼女は、うんうん、と頷いた。

もう、この混雑は毎日の通勤だけでうんざりだ。

熱気が彼女の私怨も周りの雑念もみんな飲み込んでしまっくらしいに辺りを支配していた。

右に左に翻弄される人ばかりとわたしと彼女は、苦勞を共にする盟友のようなもので、唐突に袂を分かつこともあれば、期せずして新たな友が加わることもあった。そんな仲間意識を感じていたのは電車のなかでわたしひとりだけだったかもしれない。それは何分かおきに何度も繰り返され、ついにわたしたちが離脱するときにも周りはなんの関心も示さなかった。

「結構人がいるわね」わたしが言うと、彼女は疲れた表情でまた、うん、と頷いた。

同じ駅で降りる人は思った以上にいて、わたしはその人の多さに呆気にとられてしまった。

「ああ、もう人混みなんていやっ」

彼女は人混みの真ん中で怒号した。しかしその声はわたしの耳までかろうじて届くと、すぐに雑踏に掻き消された。

「こうなったら強行突破よ。裕子さんも遅れないで！」

彼女はいつものたくましくて頼りになる姿に戻って、人混みをものともせず掻き分け進みはじめた。わたしは早歩きの彼女から離れないようにとぴったり後ろにくつついて構内を歩いた。

「ほら、こつちよ」

彼女は黄色い案内板を指さして振り向いた。

「なんだかもうここまでで大冒険って感じね。冴恵さんなんて普段電車使わないから疲れたんじゃない？」

彼女はとびきりの笑顔でそんなことはないと主張した。

「冒険はこれからっ。気合い入れてアトラクションを全部遊び倒すわよー！」

彼女は意気込んでファイティングポーズを取った。

休日の遊園地は当然と言えば当然なのだが、それにしたってあまりにも人が多く、正面入り口を通ったところでアトラクション全制覇の目標は夢幻のように散った。

「参ったわね。これじゃあせつかくの一日フリーパス券が無駄になっちゃうじゃない」

彼女が前に並んでいる子供よりも口をとがらせてぶつぶつ言い出したのは、ひとつ目のアトラクションに並びはじめて十分くらい経ったときだ。

「休日だもの。仕方ないよね」

周りのどこを見ても人のいないスペースは見あたらない。

ただの道端にさえ人は溢れている。

右を見ても左を見ても人、人、たまにテーマパークのマスコット。上を見ても下を見ても人の声、音、絶叫。

「今なら世捨て人の気持ちかわからなくもないわ」

彼女は深く頷いてわたしの意見に同調した。

「もつつ。混むってわかつている日に、なんでまたみんな集結して混雑に輪をかけようとするのかな。集団主義。日本人の悪いところよ」

彼女は自分以外のすべてを見てそう評した。

「ねえ、どうして混みそうな日を選んだの？」

そう訊くと、彼女は腕組みをして額にしわを寄せた。

「完璧だと思ってたわたしの計画もひとつ誤算があったのね」

彼女はひとつのことに集中すると少し抜けたところが出てきてしまつた。

「まったく。わたしたち以外の人がいることを考慮するのをすっかり忘れてたわ」

そう言つて表情を崩し、ぺろつと舌を出した彼女とわたしは、傍の賑わいに紛れて大声で笑つた。

そんなことをぺちやぺちや話しながら、たまにオーバーなアクシヨンで笑わせてくれる彼女のおかげで、密集したなか長時間並ぶのもそれほど苦にならなかつた。

彼女も並ぶだけなら疲れ知らずといったところで、興奮してこぶしを振りあげた拍子に後ろの子供の額に肘鉄を食わして、お母さんに睨まれたとき以外は常に元気を保っていた。

「午後こそはがんばらなきゃね」

彼女は買ってきた揚げドーナツと温かそうなスープをテーブルに置くなりそう言つた。

「うん。まだひとつしか乗ってないのに、もうお昼近くなつちやつたものね」

わたしは食料調達してきてくれた彼女の労をねぎらつてから、まずはドーナツに手をつけた。

「お昼、本当にこれだけで足りる？」

「うん、わたしは大丈夫。冴恵さんはいいの？」

「わたしも平気よ」

彼女は口をもごもごさせながら、午後のプランを立てようとパンフレットをテーブルの半分に広げた。

「それにしても、外に席があるところを選んでよかったわね。すごく気持ちがいいわ」

彼女が押さえつけるパンフレットは静かにはためいた。

近くのアトラクションから聞こえてくる男の人の勇ましい声やお客さんの歓声に合わせて、彼女はアトラクションの様子を想像だけで実況した。

そんな彼女にわたしもまた戯けてつつこんだりする。居心地のよさについていっつい食べる速度も遅くなり、ふたりでいつまでもここに居座っていた。

さっきまで隣のテーブルで食事していたはずの若いカップルは、いつの間にか孫を連れた年配の夫婦になっていたし、飲みかけだったスープはもういつの頃からか冷めてしまっている。

以前は騒がしいくらいだった彼女も、今はもう思いだせないくらい前から黙りこくっていた。

わたしはドーナツをひと口食べて、口数の少なくなった彼女を遠目に見た。

彼女の瞳は一点を見つめたままで、すぐ前にいるはずのわたしを知らずにいた。

「裕子さん」

彼女がわたしの名前を呼んだのは、わたしが声をかけようとしたちょうどそのときだった。

「どうしたの」

彼女は目線でわたしの後ろを指した。

振り向いて見た先では、見知らぬ男女が会話を楽しんでいた。

「あの人、初めて会った頃のあいつになんとなく似てるわ」

向き直ったとき、彼女は最後に残った少し大きめのドーナツのかげらを手に取り、ほほえんで彼らを見つめていた。

「時間が過ぎて変わったものは、きつとなにがあっても元に戻らな

いんだわ」

彼女はそう言って、最後のドーナツを頬張った。

確かに隣の老夫婦はもう若い恋人同士には戻らないし、冷めてしまったスープも温かかった頃を思いだすことはないけれど、それでも彼女だけは五年前に戻っていた。

「わたしとあの人がつき合いだしたのってね、ナンパがきっかけだったの」

彼女はかわいい笑顔で指をぺろぺろなめた。

「ねえ、笑えない？ 彼がナンパしてきたのよ。緊張し過ぎて前髪なんてふるふる震えていたわ」

彼女はそんな彼が憎くてではなく、愛しくて笑っていた。

わたしが彼女の旦那さんのことをあまり詳しく知らなかったのは、彼女が職場でも、こつやつて遊ぶときでもあまり彼の話をしなかったからだ。だから、彼女がこんなに彼の話をするのはちょっと不思議だった。

少し楽しみにしていた夜のショーを涙を吞んで諦めてきただけあって、駅に着いたのは日が落ちきるまでにはまだいくらか余裕があるくらいの時間帯だった。

車内は来るときとは比べものにならないほどに乗り心地がよくて、たった二、三人につき一両を丸々貸し与える鉄道会社の粋な計らいにわたしはすっかり満足していた。

それなのに左側に座っている彼女はといえば、電車に乗ってからというもの、日頃の威勢のいい面影はどこかへと消えていつてしまっている。

夕空が向かいの広い窓からなかに染み入れてくるあかね色の繻子は、彼女の痛みも周りの静寂もみんな飲み込んでしまいうくらいに辺りを覆い尽くしていた。

朝はごうごうと轟いていた足下の線路も、今は時折たんたと乾いた音を鳴らすだけ。もの柔らかなその音に合わせて、わたしの視界からはほんの一瞬ずつだけ、かすんだ朱色が奪われた。

不安定な色を映した瞳の彼女は、ときの間も休むことなく春の暮を見続けている。

ほんの数センチメートルの距離から見つめられているのにも気づかず、彼女の眼は遠い空に奪われていた。

視線をまた外に戻して少ししたとき、離れたビルの屋上から三つ連れの鳥が空に飛びこんで小さな光になった。

「今、銀の鳥が飛び立ったわ」

彼女は連れだって飛ぶ鳥たちを指さして言った。

そんな彼女も、わたしも、ずっと向こうでげんなりしているサラリーマン風の男性も、きつと思うことは違っていたのだろうけど、それでも足を軽快に打ち鳴らす温かい床はその誰もが感じていたはずだ。

「ねえ、お世話になったお礼に、今夜はわたしがなにかおいしい料理を作るから楽しみにしててね」

笑った彼女は、底抜けにご機嫌で穏やかな電車のなかの、他の誰よりも生彩に満ちていた。

時計の針が密やかに夜の七時を知らせたとき、窓を覆う春色のカーテンが少し揺れたことに気づいた。

「やだ、もしかしたら窓開けっぱなしだったかも」

わたしは夕食を食べる手を休めて、窓に寄っていつてカーテンの裾をめくった。

「やっぱり開いていたわ」

ベッドの壁側の端には、公園の桜が零した花びらが何枚か落ちていた。

「裕子さん」

わたしは窓を閉めて、桜色のベールをまとった彼女に振り返った。

「どうしたの？」

彼女もまた手を休めて、改まった表情でわたしを見すえた。

わたしは食事の席に戻り、彼女と向かい合った。

「協力してくれて、ありがとね。やっと明日で終わりよ」

「協力だなんて。寝るところ貸してるだけじゃないの。今日なんて遊びに連れて行ってもらって、それにこんなにおいしい料理も食べさせてもらえて、わたしの方がお礼を言うわ」

彼女は激しく首を振った。

「そんなことないわ。裕子さんの助けがなかったらこの計画はうまくいかなかったわ」

本当にわたしの協力によって彼女が復讐を成し遂げたとしたら、それはうれしいことではない。

どうして、親友と旦那さんが不仲になる手伝いなんかしてしまっただろう。

泊まることを貸して、今日は一日一緒にいただけ。それだけでも協力したことになったのなら。そうだったとしたら、そんなことしなければよかった。

「裕子さん」

彼女はわたしを優しく呼んだ。

「悲しい顔をしないで。わたしとあいつとは、しょうがなかったのよ。裕子さんがなにかをしてくれても、しなかったとしても、いつかはこうなってしまうたのよ」

彼女は、こんなことに巻き込んでしまっただごめんね、と穏やかにわたしをなだめた。

彼女の方がつらいに決まっているのに、わたしがこんな風にしてもらってなんだか申し訳なくなった。

「でも、明日からの住む場所はどようするの？」

彼女がもう家に帰らないことはわかっている。

もしも彼女が、こうやって知人の家を転々とするというのなら、わたしは明日以降も彼女をここに置いて、それでなんとか思いなおすように説得しようかと心に決めたのだ。

「明日からのことだって大丈夫よ。なんてったって、わたしの計画は完璧なんだから」

彼女は元気に笑ってみせて、すっと立ち上がった。

「ほら、ここにも桜の花びら」

彼女はポストンバッグの上から、彼女と同じ色の花びらをすくい上げて、それを愛おしく見つめた。

今朝はとても穏やかで、彼女が昨日多めに作り置きしておいたおらずに朝から舌鼓を打つこととなった。

「ねえ裕子さん。これ、本当においしい？」

出し抜けの質問にわたしは、どうして、と訊きかえした。

「おいしいって言うてくれるのはウソじゃないと思うんだけど、なんていうかな、昨日も食べたし、なんとなく飽きない？」

「え。なんで。全然そんなことないよ」

彼女の料理には昨日から本当に感心しきりだったのだ。

「そう、よかった」

彼女は心底安心したようにみそ汁をすすった。

「どうしてそんなこと訊いたの？」

訊いたものの、別段深い意味があったとは思っていない。きっと彼女は残り物を出したような気がして言ったのだろう。

「これ」

彼女は大皿を箸で差した。

「ひじき？」

そこには残り僅かになったひじきが盛られているだけだ。

「こんなに大量に作って馬鹿みたいだと思わない？」

わたしには彼女がなにを言いたいのかがさっぱりわからなかった。

「どういうこと？」

「わたし、先月の終わりにこれと同じ献立で夕飯作ったのよ。そしてたらあいつ、なんて言ったと思う？」

「なんて言ったの？」

彼女は箸をお茶碗の上に強く置いて、身を乗り出した。

「ひじきばかりこんな食べられないって言ったのよ！」

わたしは彼女が冗談を言ったんだと思った。しかし彼女の表情は真剣で、笑顔を作りそうになった口元をきゅっと引き締めた。

「あいつつたらね、ひとつのおかずをたくさん分量作るんじゃないかと、少しずつの量で品数を増やせて言ったのよ。しかも、さもそれが世間一般では当然みたいなのに、あっけらかんと、軽々しくつ。そんなのって信じられる？」

彼女は悔しそうな顔付きで唇を噛んだ。

「どういうことだか、裕子さんにはわかるでしょっ？」

「たぶん、だけど」

普段から料理はあまりしない上に結婚だっただけのことがないわたしには、彼女の言わんとしていることはおぼろげにしかわからなかった。

「ご飯を作る方の身にもなってほしいってこと？」

「そうっ。その通りよ。それがあいつにはわからないの！」彼女はさっきより険しくなった表情で言った。「おかずを一品増やすのがどんなに手間かわかってないの。仕事して、疲れて帰ってきて、今度はやってもやっても終わらない家事をするのよ」

彼女が文句を言った相手は、ここにいなかった。

「五年間ずっと、こんなにがんばったのに」

彼女は歯を食いしばって、それからなにも言わなくなった。

「冴恵さん」

彼女は俯いていて、わたしは泣いているんじゃないかと心配になった。

「冴恵さん？」

「そう。だからね」

彼女の口は動いたような動いていないようなので、喉元が胸のうちから直接言葉を出したようだった。

「だから……？」

わたしは恐る恐る復唱する。

「だから、ね」

彼女は顔を上げてにっと笑った。

「だから、復讐してやるんだって。そうよ、何倍にもお返ししてや

るのよ」

彼女はまた平気な顔をしておかずを食べはじめた。

彼女の空元気はおとといから日増しに気にかかるようになっていた。やっぱり、ここはわたしがどうにかするしかない。

今日、彼女は男から彼女自身を奪回する。

玄関口で彼女は、ボストンバッグを床に置いて空いた両腕を一杯に広げて、「わたしは、あいつにとって三分の一は占めているのよ」と言った。

彼女の目は本気で、語気に迷いはなく自信に充ち満ちていた。

わたしが、「ずいぶんと強気なのね」と嫌味を言っていると彼女は、「三分の一でも足りなくらいかな」と鼻を高くして言った。

彼女はわたしとの別れ際は明るくできて満足したようだったが、わたしは全然そんなことなかった。

じゃあね、と玄関の戸を閉めかけた彼女の腕を掴み、玄関のなかにくんと引き入れた。

「どうしたのよ？」

「わたしも行くわ」

彼女は戸惑ったけど、でも拒みはしなかったのだった。

ふうと息を漏らした彼女は、ストローでグラスの氷を掻き回してからからと小さな音を鳴らした。

「ほんとに大丈夫なのに。裕子さんて案外強引なことするのね」

たぶん世界中探してもなかなかないような強引な手段に打って出た彼女が言うのでは世話ない。

「変な男に捕まらないようにね。いい人を見つけて、わたしがちゃんとした人だって確認したら帰るわ」

今日、彼女は男から彼女自身を奪回する。

不可解な復讐計画のなかでも一層不可解さを増した最終段階を、彼女はなにかメインイベントのように待ちこがれていた。

「あ、ほら。子供が転んだわ」

彼女の指さした先は窓の外のオープンカフェのもっと向こうで、小学生くらいと思しき子供が立てひざで顔を擦っていた。

「ほらほら、危ない危ない」彼女は届かない声で注意を促す。突風で飛ばされそうになった帽子を、その子は両手で頭に押さえつけた。

「このところ風の多い日が続くわね」

そう言った彼女は、また手元のストローを操って氷の音を奏ではじめた。

「ねえ、冴恵さん。やっぱり、どうあっても考え直すのは無理なのね？」

彼女は指揮棒を振り回すのをやめて、グラスから抜き出したストローの下端に口付けした。

「あいつとはもうダメなのよ。こうするのが、きつと一番いい結果を生むんだわ」

一度思い込んで突っ走りはじめた一直線な女性の背ほど固いものはない。

彼女は適当にくだらない男にナンパされて、その男にくつついていつてそこで生活するというのだ。

そんなの馬鹿げていると止めたのに、わたししたらどうして彼女と一緒にのんきにお茶なんてしているのだろう。

「やっぱりダメよっ」

いきり立って発した声に、来店以来ずっと店内に声を轟かせていたおばちゃん集団がしんと静まりかえった。

ときを一にして、集団のなかでも特にこつてり作りが目立つひとりの婦人が、こちらまで聞こえてくるくらい大きな声のこそこそ話を始めた。

「どうしたのよ、いきなり。他のお客さんに見られてるじゃない」わたしの視界からは彼女以外の音も色もすべてが消えていた。

「ダメよ冴恵さん。お願いだから、このまま一緒に帰ろう。わたしの部屋だったらいつまでいてもいいから！」

彼女は悲しい顔になったあと、今度は明るい笑顔になってわたしの両手を優しく握った。

「ありがとう。こんなに気遣ってくれてうれしいわ」

彼女はそう言って握る手に力を入れた。

「旦那さんとは別居すればいいだけじゃないっ。今どき珍しい話じゃないわ。ね。本当に、元に戻れなくなってしまっようなことをしてはいけないわ」

彼女は、ありがとう、ありがとう、と言うだけで、わたしがいくら説得してもそれを聞き入れることはしなかった。

「裕子さん、元に戻れなくなるのはつらいわ。なにかが変わってしまっことも恐ろしいと思うもの。でも、ずっと心配とか不安とかを抱えたままの日々が続くのも心身には負担なのよ」

彼女は力強いまなざしをわたしに投げかけた。

「わたしが行動を起こすしかなかったの」

もう止めることはできないんだ、と諦めるのはおとこの夜からこれでもう何度目か知れない。

わたしがコーヒーの最後の一滴を舌に乗せてからしばらく経って、とうとうカフェを出るときになっても、例のおばさん方はこちらを窺っているようだった。

「冴恵さん、あんなおばちゃん連中の暇つぶしなんて気にすることないわ」

「気にしてるのは裕子さんの方じゃない」

彼女はまさに的確なことを言った。

わたしよりもコーヒー一杯を有意義に活用している向こうの婦人方は、少ない情報からもことの筋骨きを組み立ててしまうほど優れた構想力に秀でていて、彼女たちがその本領を發揮するのに話題渦めく街角ほど適した場所はなかった。

わたしたちがカフェのとびらを閉める頃には、彼女たちは事情をすべて知ったかのように、ああだこうだとうわさ話を繰りひろげていた。

「ふん、犬も食わない夫婦げんかを盗み食うだなんて、あのおばさんたちのお里が知れるわ」

じゃあ、好きこのんで食べているわたしはなんなのだろう。

彼女はわたしの目顔を見て、どうしたの、という顔をした。

「それから、裕子さん。あの、ありがとね。お金、必ず返すから」
ポストンバッグを駅のコインロッカーに置いてきた彼女は、財布まで一緒に入れてきてしまったのだ。

「いいわよ。気にしないで」

ナンパされるのにはいい場所知ってるのよ、と言った彼女に連れられて、わたしは一度も来たことのない土地に降り立っていた。

「その場所って、ここからどのくらいなの？」

「すぐよ、すぐ」

ここはとても不思議なところで、自然が多くていいわね、と言っ

た傍から真上に高速道路が架かる道に出て肩透かしを食わされたりした。

やがてたどり着いたのは大きな自然公園で、いつの間にかアスファルトが土の道に変わっていた。

「こんな場所があったのね。ドラマ撮影にでも使われそうな感じ」「雑踏を知らない桜並木は地平の果てまで続いている。

「でも、男の人がナンパしてくるのには似合わない場所ね」

「なに言ってるの。名所よ、名所」

それは到底根拠のある言い分には聞こえなかった。

並木道は行けども行けども土と桜に挟まれた世界で、人とすれ違いうことも稀であった。

日は高く上がり、傾き、ついにこの世界も橙色に染まり、それが濃くなつた頃になつてもわたしたちは二人きりで、いつか同じようにふたりでいた並木道の入り口に舞いもどつていた。

いやらしく嫌味のひとつでも言おうかと一歩先行く彼女の背中にどんと向き合ったわたしより先に、彼女の方が口を開いた。

「どうして復讐することにしたのか訊かないわね」

赤い木漏れ日を透明な体に受けた彼女はひよいと身を翻した。

「今までのことが積もり積もつて、つていうわけじゃなかったの？」

彼女はほえんだまま眉を下げて首を横に振った。

彼女がこんなことに踏み切つたのには、なにか決定的な理由があったんだ。

わたしは木々の光に包まれた彼女に一歩近づいた。

「やつぱり、よつぼどのがあったんだとしても、……結婚してるのに男の人に誘われるのを待つなんていけないわ」

たぶん彼女は笑顔のまま身動きひとつしていなくて、それなのに夕日に焼かれた赤い空気にたゆたつて見えたのは、強い光に目がくらんだせいだ。

「ね、まさか、もう離婚の手続きしちゃったとか？」

彼女は満面にまとわる夕空の色を優しく振り落とすように再び首

を左右に振った。

もしかしてあのバッグのなかに離婚届が入ってるのか。それとももしかしたらまだ彼が印を押していないからって、家のテーブルに広げてきたとか。

言葉の途切れたほんの僅かなあいだも逆光は目に痛く、段々と彼女が見えなくなっていった。

「離婚届はまだ用意してないわ」

顔のない彼女はそう言った。

「おととい、仕事が終わったあと役所に行ったんだけどね、もう閉まってるもらえなかったの」

彼女はわたしに歩み寄り、短いあいだ失っていた顔の形こそ取り戻したものの、合わせる顔はないという面持ちだった。

「ごめんなさい。本当は復讐なんて計画を立てていたことじゃなかったの」

彼女は一昨日の夜から復讐のためにその身を削り続けていた。

「一昨日ね、仕事から帰ってきて決めたことだったの」

彼女はわたしから目を離さずに真っ直ぐ言った。

「なにが原因だったのか、話してくれるの？」

彼女は少しためらったようにして、それから少しずつ、ぽつりぽつりと口にしはじめた。

最近あいつの仕事の時間帯が変わって顔を合わせる事が少なくなっただって言ったじゃない。あいつの帰宅時間はわたしが熟睡している頃だし、わたしが家を出る時間にはあいつはまだ寝ているし。ここしばらくは言葉を交わすことさえなかったの。ただのひとこともよ。夫婦なのに、それって尋常なことじゃないと思わない？　それで、わたしが家に帰ってくる時間を見計らって電話をかけてきてくれたって話はしたでしょ。……わたし、あいつにね、こここのところ全然話をしてなかったね、って言ったの。「そしたらね」

彼女の頬は斑な彩色を施した自分の体よりも濃い紅色に染まった。

「あいつは、話をしてないって言ってもたったの一週間だろ、って言ったのよ」

「冴恵さんにとっては一週間も長かったのね」

「んーん、違うの」

彼女は瞳の先をわたしの顔から首もと、つま先へと緩やかに落と
していった。

「二週間だったの」

そう言っ
て息を吸い込み、ゆっくり吐き出した。

「あいつの声を聞かなくなって、あいつに声を聞かせなくなって、
二週間経ってたのよ」

さつきから彼女の黒目がちな眼は静かに揺らめいている。

「あいつにとっ
て、一週間会わないも二週間会わないも同じってこ
とじゃない。それなら一生会わなかつたって一緒よっ」

唇を噛んだ彼女が、それでも硬い土の上に雫を落とすことはなかつた。

「裕子さんは、そんなのくだらないこと
って思う？ そんなこと
で家出るなんてどうかしてると思う？
それでもね。わたしは不安
で不安でしようがなかつたの。あいつはわたしのことなんて、もう
どうとも思っ
てないんだつて。いつかわたしから離れていくんだつ
て。そんなことを考えてしまうの」

「くだらない理由だなんて、思わないよ」

触れれば砕け
そうな彼女が怖くて、それ以上はどんな言葉もかけ
られない。

「五年間、わたしは必死にや
ったわ。でも、あいつは裏切るのよ。
だから……」

だから、復讐してやるんだ、と彼女は幾分か軟らかくなった地面
に囁きかけた。

冴恵さん。

見つからない言葉に、わたしは名前を呼ぶこともできなくなつて
いった。

それからしばらく彼女の肩を抱いて、一生懸命に胸の内側から彼女に語りかけたけど、彼女の袖の氷は溶けなかった。

夕暮れの鋭い彩りに身体感覚が麻痺してきて、彼女が泣いているのかどうか、わたしが今なにをしているのかもわからなくなっていた。

冴恵さん。

言葉はまだ見つからない。

同じ体勢のまま人ひとりの体を支えるのは思いのほかつらくて、夕日の斜光が彼女と水平の位置にきたとき、とうとうわたしは彼女もろとも地面に崩れ落ちてしまった。

少し強めに打ってしまった腰は痛いし、両手は土まみれだし、もうわたしまで泣きたくなくなってきた。

両側から威圧する並木が憎かったし、沈みきらない夕日にも早く消えてほしかった。

わたしが声を失ってからもうどれだけの時間が過ぎたか知れない。正面の眩しさは遠いところからわたしの視力と声を奪い続ける。

今はもうなにも見えないし話せない。

ごめんなさい。せめてわたしはしっかりしなければならぬのに。冴恵さん、ごめんなさい。

「冴恵」

わたしは両手をついてまだ赤々としている世界を見上げる。

彼女を呼んだのは、わたしでも、わたしの胸でもなくて、わたしはのろのろと起き上がり、その優しい声の夕影に一礼した。

「なんでこんなときに」

彼女は座り込んだままぐちゃぐちゃの顔を上げて、彼女の旦那さんを見すえた。

「わざとでしょ。こんな惨めな姿になるの見計らって声をかけてきたんでしょ」

彼はわたしにハンカチを渡してひとことふたことお詫びとかお礼とかを言ったあと、しゃがんで彼女に手を差し伸べた。

「違うよ、冴恵」

彼は、渋った彼女の手を掴み、肩にもう片腕を添えて彼女をそつと立たせた。

「なんているの。仕事があるんでしょっ」

「今日は休日だよ」

彼は彼女の服に付いた土を手で払いのけた。

「わたしはもう家に帰らないのよ」

わたしが返したハンカチを丁寧に畳んだ彼は、今度はそれで砂のついた彼女の手を指の一本ずつから拭いはじめた。

「そんなこと言ったら、この子が悲しがるよ」

彼女は目色を変えて俯いていた顔を振りあげた。

「家に帰ったら冴恵はいないし、保育園からは何度も留守電が入っているしで驚いたよ」

彼女は彼の手を振りほどき、彼のすぐ後ろでおじおじしている小さな子供を抱きしめて小さくなった。

「冴恵。この子も置いていくつもりだった？」

彼女は無言のまま首を激しく横に振った。

彼女はひとつのことに集中すると少し抜けたところが出てきてしまっ。

「あなたが迎えに行ったの？」

「そっだよ」

「保育園の場所、どうしてわかったの？」

「入園を決めるときに一緒に見に行っただろ」

彼女はそのまま動かなくなった。

「なによ。今ごろになってやっとわたしを見つけても遅いのよっ。どうしてわたしが家出したのかもわからないんじょ」

彼は前屈みになって後ろから彼女の頭に手を置いた。

「一日目はジュエリーショップにいたね」

彼女の体はびくっとして、それからまた動かなくなった。

「捜しに来てたの？」

彼は頷いたけど、彼女からはそれが見えなかった。

「そのときは、家のお金もなくなっていたことだし、なにか欲しい物があつて家を出たんだと思つたんだ」

彼はとても穏やかな表情をしていたけど、それを今見ることできたのはわたしだけだった。

「どうしてそのとき声をかけなかったのよ」

彼は握りこぶしを口にやって、少し考えた素振りをしてからばつの悪い顔をした。

「ごめん。大きなバッグを持っていたから、もしかしたら誰か男のところに行くんじゃないかと思つて、様子を見ていたんだ」

彼はわたしの方を見て顔をほころばせた。

「でも、裕子さんの部屋に入っていくのを見て安心したよ。冴恵があなたを頼りにしていることは知っていたから。ひと晩だけ、冴恵をお願いしようと思つたんだ」

深々と礼をした彼に、わたしはなんだかこつ恥ずかしくなった。

「さすがにずつとお世話になるのは申し訳ないと思つて、朝になつて迎えに行つたんだけど、ちょうど出掛けるところだったみたいだね、それで、まあ、階段の下で図らずもふたりの会話が聞こえてね。遊園地に行くつてせつかく盛り上がっていたから、昨日も退散したんだ」

わたしとしたことが、少し心が浮かれていたただけなのに、彼が近くまでできていたことに全然気がつかなかつたなんて。

でもそれは彼女も同じで、まさか順調にことが進んでいると思つていた水面下で、彼がこんなにも彼女の行動のひとつひとつを知っていたなんて思いもしなかつただろう。

「それでね、二日目は、ああそうか、きつと息抜きがしたかつたんだとな、と思つたんだ」

「全然わかつてないわよ」

彼女はずつと変わらない姿勢のままと言つた。

「そうだね。見当違いだった」

しゃがむ彼女の正面に回り込んだ彼は、彼女と同じ恰好になって彼女と視線を合わせた。

「きみが出ていって三日目の今日になって、それは違っつてわかったよ」

「なにがわかったつていうのよ」

彼女は顔を逸らし、彼と自分とのあいだできよろきよろする愛し子をますます引き寄せて胸に埋めた。

「一日目にきみがいたのは結婚指輪をふたりで選んだお店で、二日目は初めてデートした場所だったね」

彼女ははつと目を見ひらいて、再会して初めて彼を見つめた。

遠い夕空の色を受けたせいで紅潮した彼女の頬に、それでも執拗に自分の色を押しつける夕日をわたしは穏やかに睨みつけた。

「それにね、冴恵。ここは」

「ここは、あなたとわたしが出会った場所よ」

彼は笑って、知ってる、と言った。

「冴恵。ずっと、僕に見つけてほしかったんだってわかったんだ」

彼は彼女をまるで水に浮かべるように柔らかく立ち上がらせた。

「不安にさせてしまっていたんだね。ごめん」

唐突にわつと泣きだした彼女を彼は両腕で抱き込んだ。

突風に鳴いた木々のさざめきとちらちら降る散光に、その出来事はまるで一瞬の無声映画みたいに切りとられた。

「あなたはもうわたしのことなんてどうでもよくなっただんじやないかって。あなたはわたしのことなんてひとつも見ていないんじゃないかって。自分勝手な考えで頭がいっぱいになっていたわ。この子を忘れてしまっただなんて、どうかしていたわ。あなたからすべてを奪い取っても、わたしのすべてをあなたのところに置き去りにしてきては意味がないものっ」

わけもわからずふたりのあいだできよとんと上を見る子供は、視線の彼方にある空を仰いでいるように見える。

「こんなこと、最近なかったわ」

彼女は彼の胸から顔を離して眩しい光に横顔をさらした。

「こんなのは時々だけでいいから。その代わり、お願い」

彼女はなにかぼそぼそと言い、マスカラに落ちていた桜色はひとまわり体の大きな彼に再び遮られた。

また明日から始まる仕事に向けて、わたしにはまだ寝る前にするべきことがいくつあった。

明日会社に着ていく服の選定と、歯磨きと、丸三日ほったらかしにしていた肌へのいたわりと。

「そうだわ。それと」

独り言はおばさんへの第一歩、と口を手で押さえて、カーテンと壁の隙間に体を滑り込ませた。

がらりと開けた窓の外。春の宵に浮かぶのは程遠い下の方からのほのかな春色を受けてかすむ静かな月で、わたしは彼女に代わって報告をしなければならなかった。

冴恵さんは、確かに計画を成し遂げました。彼女はその思惑どおり、彼女の言うところのくだらない男に連れられてどこかへ行ってしまう以上。

直径一・五センチメートルの小さな春月は、木の枝がさざめくごとに移ろう花のかけらよりも遙か遠いところからささやかに頷いた。彼女が彼にしたお願いが聞き入れられたのか、もしくは元より叶っていたのかはわたしの知るところではなかったが、ずっと前に初めて彼に会ったときにも、今日ふたりにさよならを言って別れたときにも、彼の瞳に映っていたのは、彼女だった。

窓を閉めて明るい夜に別れを告げ、わたしはほっと息をついた。振り向けばそこにある、昨日よりも少しだけ広くなった質素で約やかなわたしの部屋は、わたしの体、わたしの生活に間違いなくフィットしていた。

(了)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8069s/>

まつげの先より近い距離で

2011年4月29日15時25分発行